

研究ノート

「あまつましみず」の歌詞と曲

石田 聖実

プロローグ

水曜の祈祷会では始めに3曲ぐらい歌う。次の日曜日にみんなが知らなそうな歌を選んでいる場合は、それを指定するが、それ以外はリクエストで決めている。先日は『あまつましみず』をリクエストした人がいた。隣に座っていた人に「『あまつましみず』ってどういう意味？」と聞いたら、「余分な水？」と返ってきた。私は以前は「増し水」だと思っていたことがある。本当は「天つ真清水」だ。漢字で書けばわかるが、かなで書かれていたらわからない方が普通だと思う。

さて、鈴鹿教会では1年前に歌集を「讃美歌」（1954年版）から「教会福音讃美歌」（2012年発行）に変えた。『あまつましみず』は教会福音讃美歌471番である。

右に示したのがその歌詞であるが、「讃美歌」217番そのままである。「教会福音讃美歌」編集者の一人である中山信児牧師によると、いくつかの歌は新しい翻訳をしていないとのことである。例えば『いつくしみ深き』は「讃美歌21」なども54年版の訳詞をそのまま使っている。「讃美歌21」は『いつくしみ深き』に変えて、不評を買った。歌詞を変えるのは難しい。だが、意味もわからずに歌っているなら、呪文と同じではないか。聖書や賛美歌には言葉の奥に深

い意味があるというのはわかるが、少なくとも表面的な言葉の意味は辞書を引かなくても済むというのは最低限守られるべきではないだろうか。「讃美歌 21」でも「教会福音讃美歌」でも、多くの歌詞が現代の若い世代にもわかるように訳し直されている。ところが、この歌は 1931 年版「讃美歌」、1954 年版「讃美歌」、「讃美歌 21」、そして「教会福音讃美歌」と改訂されることなく継承されてきた。作詞者は永井ゑい子、つまり日本製の賛美歌だから変えにくいのもあるかも知れない。

他教派の歌集に目を向ければ

「希望の讃美歌」（セブンスデー・アドベンチスト 2006 年）242 番、
「新聖歌」（日本福音連盟 2001 年）433 番、
「インマヌエル讃美歌」（1965 年の旧版）90 番、同（1981 年版）154 番
にも掲載されている。教派を問わず広く日本の教会で歌われている、日本人による歌の代表作と考えて良いだろう。

しかし曲は日本人によるものではない。元はどんな詞が付いてたのか？と考えて思い出したのは結婚式の歌である。

讃美歌 430 番「いもせをちぎる」

聖歌 350 番「ふたりが合いて」

これらの元歌は？と思って歌集を開いてみると、「讃美歌」430 番は Shinsen Sambika、これは作者が日本人であることを示す。「聖歌」351 番は 作詞 Ugo Nakada。どちらも日本人の作だ。そこで、本稿では

①歌詞と永井ゑい子について

②楽曲 HOME と作曲者 J.H.McNaughton について

できる限り明らかにしたい。またそれによって

③明治初期の生まれたばかりの日本プロテスタント教会が、賛美歌をどのように受け入れたかを考えたい。

前提と周辺知識

少し長くなるが『讃美歌 21 略解』の解説を引用しておく。

404 あまつましみず

作詞者は永井（松本）ゑい子（1866－1928）。彼女は千葉県に生まれ、幼時から両親の教えを受け、短歌・習字などに天賦の才を発揮、東京の救世学校（現・青山学院）で英語その他を学びました。メソジスト教会宣教師デヴィソンの依頼により、彼女は救世学校から選ばれて横浜に赴き、彼の助手として『譜附基督教聖歌集』（1874）の編集を助けました。後に女子高等師範学校（現・お茶の水女子大学）や華族女学校（現・学習院女子短大）などの助教授、さらに毎日新聞の記者となり、1901年に渡米、日本をアメリカに紹介する活動を続けました。永井元と結婚、ほどなくパシフィック大学から学位を受け、また保険業務などに従事しましたが、1928年にサンフランシスコでなくなりました。

この歌は上記聖歌集の編集中に、ヨハネ 4:14,7:38 の「生命の水」の聖書箇所を基に創作した賛美歌です。原作は各節が七五音節の4行詩（今様形式）で、幼さが感じられますが瑞々しい表現がよく表れ、最後の一行は「そのましみづをいくちよも くみてたのしく われはのまん」（何千年も、私は楽しくその水を飲みたい）と結んでいます。『新撰讚美歌』（歌詞版 1888年、譜付 1890年）で松山高吉が徹底的に加筆、より客観的な賛美歌となり、さらに『讚美歌』（1903）では詩形を一部変更しています。歌詞はその後さらに改変が加えられ、永井の原作は各節の冒頭句しか残っていません。

HOME は、おそらくアメリカの福音唱歌曲で、作曲者はジョン・マクノートン John Hugh McNaughton (1829-1901)です。出典、初出年、作曲者の経歴などは不明です。（MH）

宣教師が持ち込んできた伝道用福音唱歌だとすれば、曲だけではなく歌詞もついていたはずで、日本語に訳されて歌われたはずである。その替え歌として「あまつましみず」や「いもせをちぎる」が作られたのだろう。この曲 HOME で歌われる英語の賛美歌はどんな歌なのか、またその日本語訳はあるのだろうか？

Facebook Group「讃美歌の虫干し」¹で尋ねてみる

SNS(Social Networking Service)の Facebook には「グループ」というのがあり、特定の主題に関心がある人たちが集まってディスカッションをしている。「讃美歌の虫干し」とはいささか変わったネーミングだが、いろんな賛美歌(ふだんあまり歌われていない歌も)を引っ張り出してディスカッションしようという趣旨である。

「讃美歌の虫干し」にプロローグに書いたことを投げかけてみた。さまざまな反応をいただいた。そこから結婚式の賛美歌に関する話題にも発展していったが、それらは省いて「あまつましみず」の楽曲である HOME とその曲を用いて歌われたであろう歌詞についてのみ、ここで引用する。

Satoshi Koizumi 話題がまったくずれませんが。あまつましみず関連で。広島の高校でこのメロディーに校歌の歌詞がついている学校があるんですよ。ミッションスクールでもないし、校祖がクリスチャンでもない。なぜなんだろうとずっと謎。

平位 全一 そもそも「あまつましみず」の作詞者は、永井えい子、英語からの翻訳ではありませんので、このメロディ、或いは、宗教的なものではなく、一般の曲かもしれません。作曲家は、J.H.McNaughton, 1829～1901 ですが、この人物を辿ってゆくと、謎が解けるかもしれません。

Satoshi Koizumi わたしもその可能性考えてました。オリジナルはそもそも賛美だったのだからって。

安井 久人 たぶん英語はこれでしょう。

http://library.timelesstruths.org/music/Love_at_Home/ ※1

安井 久人 <http://www.seiyaku.com/hymns/jp/430.html> 上記で間違いないと思います。※2 (※1、※2 は後で訪ねてみることにする。)

まずは歌詞について調べることにする。

永井えい子と『基督教聖歌集』

¹ <https://www.facebook.com/groups/1751263861792103/>

・ J. C. デヴィソンと『基督教聖歌集』

メソジスト監督教会宣教師 John Carrol Devison(1834-1928)は、長崎で米国オランダ改革派の宣教師 Henry Stout(1838-1912)と協力して、1874年(明治7年)23篇(内4篇はデヴィソン作)から成る『讚美のうた』、次いで1877年(明治10年)五線譜付きの賛美歌集としては日本初の『讚美歌』を刊行。その後デヴィソンは東京で日本のメソジスト全体のための歌集を編纂した。1884年(明治17年)の『譜附 基督教聖歌集』、1895年(明治28年)の改訂増補版の『基督教聖歌集』である。その助手として活躍したのが永井ゑい子(旧姓松本)である。彼女は3歳の頃から書・和歌・四書五経等を学び、8歳からアメリカ人について英語を学んで、和漢英の文学に長じていた。

・ 「基督教聖歌集」における「あまつましみず」

『基督教聖歌集 譜附』1884年(明治17年)257曲

『基督教聖歌集 譜附 改正増補』1895年(明治28年)435曲

明治14年に一致教会の『讚美歌』(木版本、歌数103)が発行された。これが一つの刺激となってメソジスト教会の聖歌集編纂が急がれたのかもしれない。デヴィソンが永井ゑい子の協力によって作った『基督教聖歌集』は、当時の日本の教会で最大の歌集だった。デヴィソンは以前、長崎で『讚美歌』(明治10年)を出しているのだが、歌の数は5倍にもなり、製版方法も木版から活版となっている。楽譜の銅版は、長崎在任中に休暇を得て帰米した際、米国で製作しておいたものである。日本最大の『基督教聖歌集』が出来上がった。先に「彼が独力で」と書いたが実際には松本ゑい子との共編と言うべきだろう。デヴィソンに松本ゑい子を紹介したのは、津田梅子の父親である津田仙だった。ゑい子は当時築地の明石町にあった海岸女学校(青山学院の前身)の生徒で18歳(満17歳)であった。

デヴィソンは隠退後、当時のことを回想して次のように語っている。

「おゑいさんを見出したことは私にとって何よりの幸福でした。私はおゑいさんの名をずっと前から聞いていました。おゑいさんといふ珍しい神童があるといふことは私が日本へ来ると間もなく津田さんから聞いたのです。然し、このおゑいさんが私と一所に讃美歌の仕事をしてくれようとは夢にも想はなかつた。夫れまで私を授けてくれた日本人とは違ひ、おゑいさんには立派に英語が読めた。日本文学の素養も申分なかつた。おゑいさんは毎日のやうに私の所に来て、私と椅子を並べて仕事をした。一句一句諦しながら日本語の歌詞を練り、考へに考へて纏まったものが出来ると、夫れを更におゑいさんが手を入れて美しい日本語とし、又私は夫れを唱つて見ては語調の改む空きところを改めた。

これは明治十六年から十七年の間のことで、場所は横浜でした。おゑいさんは前後十ヶ月以上私と一所に働いてくれたでせう。実に才気煥発、見るからに快よい娘さんでした」(海老名一雄「ゑい子女史と日本の讃美歌」、『永井ゑい子詩文』)

それでは今も歌われる彼女の代表作とも言ふべき「あまつましみず」を各賛美歌集で見よう。プロローグでは「日本製の賛美歌だから変えにくいのもあるかも知れない」と言ったものである。

THE CHRISTIAN—PRAYER AND PRAISE.

LOVE AT HOME. 7. 5. J. H. McNamee.



祈
禱
讃
美

永
遠
惠
水

百
四
十
一

三	二	一	
く そ の た の し く	つ き ぬ い づ み と	よ の み づ い か で	150
あ ま つ ま し み ず	わ が た ま の ま た	あ ま つ ま し み ず	○第百五十
た ゆ る せ も な く	わ き い づ れ	あ が れ し も	LOVE AT HOME. 7. 5.
わ れ の ま ん	わ か い づ れ	あ が れ さ て	Anoda nohakimizu.

66

『基督教聖歌集』（明治 17 年）150

祈禱讚美 永遠恵水

- 1 あまつましみづ ながれきて
よにもわれにも あふれけり
ながくかはける わがたまに
よのみづいかで たりぬべき
- 2 あまつましみつ のみてこそ
わがたまはまた かはかざれ
きみのめぐみは われにこそ
つきぬいづみと わきいづれ
- 3 あまつましみづ 貴ときかな
たゆるせもなく かぎりなし
そのましみづを いくちよも
くみてたのしく われはのまん

『新撰讚美歌』（明治 23 年）115

拯救 生命の水

- 1 あまつましみづ ながれきて
あまねく世をぞ うるほせる
ながくかわける わがたまも
くみていのちは かへりけり
- 2 あまつましみづ ながれずば
つちよりいづる みづはなど
ひとのたましひ いかすべき
くめやめぐみの ましみづを
- 3 あまつましみづ ちよたえず
ゆたかにながれ ひとみなに
いこひをえしむ 主のあいは
いづみとともに あふれけり

『讚美歌 第一篇』（明治 36 年）

174 贖罪

- 1 あまつましみづ ながれきて
あまねく世をぞ うるほせる
ながくかわきしわがたましひも
くみていのちに かへりけり
- 2 あまつましみづ のむまゝに
かわきをしらぬ 身となりぬ
つきぬめぐみは ころのうちに
いづみとなりて わきあふる
- 3 あまつましみづ うけずして
つみに枯れたる ひと草の
さかえの花ハ いかでさくべき
そげいのちの ましみづを

『讚美歌』（昭和 6 年）211

教會 傳道

- 1 あまつましみづ ながれきて
あまねくよをぞ うるほせる
ながくかわきし わがたましひも
くみていのちに かへりけり
- 2 あまつましみづ のむまゝに
かわきをしらぬ 身となりぬ
つきぬめぐみは ころのうちに
いづみとなりて わきあふる
- 3 あまつましみづ うけずして
つみに枯れたる ひと草の
さかえの花は いかでさくべき
そげいのちの ましみづを

基督教聖歌集 150 番が永井忍い子(当時は松本忍い子 17~18 歳)の原作であるが、新撰讃美歌で大きく変わり、更に讃美歌第一篇で変わり、それが現在の讃美歌 21 まで継承されている。歌詞の改変に伴って分類も変わっていく。

基督教聖歌集 (1884 年) 150 祈祷讃美 永遠恵水

新撰讃美歌 (1890 年) 115 拯救 生命の水

讃美歌第一篇 (1903 年) 174 贖罪

賛美歌 (1931 年) 211 教会 伝道

讃美歌 (1954 年) 217 伝道

讃美歌 21 (1997 年) 404 宣教への派遣・伝道

原作は「くみてたのしく われはのまん」だから永遠の命に与ったことを喜ぶ歌だ。「そそげいのちの ましみづを」に改変されたので分類も「伝道」になったのだろう。歌のジャンルを変更するような改変は許されるのだろうか。

明治 36 年版(讃美歌第一篇)ではリズムが 75757575 から 75757775 に変わっている。これは曲に合わせるためだろう。この曲に合わせるためには「ながくかはける わがたまに」よりも「ながくかわきし わがたましひも」の方が歌いやすい。新撰讃美歌では形式は原作のまま 75757575 にして曲の方をこれに合うように別の曲を充てた(次のページ参照)。

しかし更に重要なのは内容の改変である。原作には「われ」「わが」という 1 人称の代名詞が多用されている。明治 36 年版では 1 人称は「わがたましひも」だけに減らした。つまり原作の個人的・主観的な性格を明治 36 年版は薄めて一般化、客観化したのである。そこには礼拝で歌われる歌は個人的・主観的なものは好ましくないという神学があるのだろう。プロテスタントが日本に入ってきたときに宣教師たちが持ってきた歌の多くが福音唱歌だったが、その後福音唱歌はずっと減り続けている。しかし、聖書自体が一人の人物の物語を通して、あるいは一つの民族の物語を通して全人類を救う神を表現している。歌においても一人の人の証を通して、全ての人を愛しておられるキリストが現れていると思うのだがどうだろうか？

曲 “HOME”について

・McNaughton と彼の作品について

「讃美歌略解」の記事では、「彼についてはよく分からないし、大した芸術的価値もない、けれどもよく歌われている歌」という評価である。

日本に賛美歌として入って来たのだから、たぶん元歌の歌詞があるはずという事で、「あまつましみず」と「いもせをちぎる」以外に HOME で歌われた歌はないかを調べたが、残念ながら各種賛美歌集には見つけることができなかった。そして私の手持ちの英語の歌集にも HOME で歌われる歌が見当たらなかった。それでは、HOME は賛美歌曲ではなく世俗的な曲なのだろうか？ 賛美歌の歴史を紐解けばルターの「ちしおしたたる」だって元をただせばラブソングの曲だったし、チャールズ・ウェスレーも「提督の歌」に合わせて作詞している。遡れば詩編だってそうだ。

けれども、「讃美歌の虫干し」の仲間がこの曲についての情報をくれた。安井久人氏が「たぶん英語はこれでしょう。」と言って教えてくれたサイト、http://library.timelesstruths.org/music/Love_at_Home/ である。

Love at Home John H. McNaughton, 1854
Meter: 7.5.7.5.7.7.7.5 R
Subjects: Love, Home
Scripture: John 11:5; Romans 12:10

元の歌詞は次のようなものである。

There is beauty all around,	Love at home, love at home;
When there's love at home;	Time doth softly, sweetly glide,
There is joy in every sound,	When there's love at home
When there's love at home;	
Peace and plenty here abide,	In the cottage there is joy,
Smiling sweet on every side,	When there's love at home;
Time doth softly, sweetly glide,	Hate and envy ne'er annoy,
When there's love at home.	When there's love at home;
Refrain 1:	Roses bloom beneath our feet,

All the earth's a garden sweet,
Making life a bliss complete,
When there's love at home.

Refrain 2:

Love at home, love at home;
Making life a bliss complete,
When there's love at home.

Love becomes a way of life,
When there's love at home;
Sweet, insistent end to strife,
When there's love at home;
Glad submission each one's gift,
Willing pledge to love and lift,
Healing balm for every rift,
When there's love at home.

Refrain 3:

Love at home, love at home;
Healing balm for every rift,
When there's love at home.

Anger cools and pressures cease,
When there's love at home;
Children learn to live in peace,
When there's love at home;
Courage to reach out in grace,
Meet a stranger face to face,
Find a reconciling place,
When there's love at home.

Refrain 4:

Love at home, love at home;
Find a reconciling place,
When there's love at home.

There's no question you can't ask,
When there's love at home;
There is strength for any task,
When there's love at home;
Sharing joy in work or play,
Confidence to face the day,
Knowing love will find a way,
When there's love at home.

Refrain 5:

Love at home, love at home;
Knowing love will find a way,
When there's love at home.

Kindly heaven smiles above,
When there's love at home;
All the world is filled with love,
When there's love at home;
Sweeter sings the brooklet by,
Brighter beams the azure sky;
Oh, there's One who smiles on high
When there's love at home.

Refrain 6:

Love at home, love at home;
Oh, there's One who smiles on high
When there's love at home.

Youtube に動画がある。

<http://www.youtube.com/watch?v=Yk2gQuJrRcA>

McNaughton 自身についても情報がある。

<http://www.seiyaku.com/hymns/en/430.html>

When There's Love At Home

John Hugh McNaughton (1829-1901) wrote both the music and words for When There's Love At Home in 1860.

He lived in Caledonia, New York, about 30 miles southwest of Rochester. John was known as 'The Poet McNaughton' for composing many songs popular at the time, though few have survived to be sung today. Other than 'Love At Home,' perhaps his most famous was 'The Faded Coat of Blue', about Union soldiers taken prisoner during the American Civil War.

The Carter Family, a famous American country singing trio, recorded 'The Faded Coat of Blue', although with a different tune from McNaughtons. There is a monument to John Hugh McNaughton just outside Caledonia, on the site of the farm where he lived.

(Our thanks to Allen Hopkins for the above information. Allen lives not too far from McNaughton's birth place and has the same sparkle as McNaughton for brilliant and original folk music, as you can hear on his website:

www.allenhopkins.org.)

(抄訳) Love at home 以外で最もよく知られている彼の作品は、南北戦争で捕虜になった北軍の兵士を歌った "The Faded Coat of Blue" 「色あせた青いコート」(訳注:blue は北軍、gray は南軍)である。

ただし The Carter Family が歌っている同じ歌は曲が違う。マクノートンが住んでいたカレドニア外縁の農場の跡地に記念碑が建っている。

The Faded Coat of Blue <https://www.youtube.com/watch?v=gvUqcMujU1s>
(1928 年録音)

<http://www.seiyaku.com/hymns/jp/430.html>

When There's Love At Home

Japanese version

Although the song is old, it is still popular and used at Western-style wedding ceremonies in Japan. The rather sombre-sounding 'chorus' is omitted, and John Hugh McNaughton's words, written in 1860, were translated in 1890 as: Imose wo chigiru...

古い歌であるにもかかわらず、日本では今なおポピュラーで、西洋式の結婚式で歌われている。暗い感じのするコーラスは省かれている。マクノートンの1860年の歌詞は1890年に次のように翻訳された。「妹背をちぎる…」

このサイトの解説によれば「妹背をちぎる」はマクノートンの詞の翻訳あるいは翻案ということになる。コーラス部分は暗いとは私には思えない。

Hymnary.org で調べる

(no biographical information available about John H. McNaughton.) 伝記情報はない

マクノートンの作詞したものとして4篇

Good night, O Savior dear Pure Diamonds に収録

In thy tender arms, O Savior Pure Diamonds に収録

Our risen Lord again we greet Sunday School Voices, No.2

There is beauty all around 110 の賛美歌集に収録 → 今回調べている賛美歌

アメリカで110の賛美歌集に載って歌われたのに、日本語には訳されなかったようだ。

hymntime.com で調べる

http://www.hymntime.com/tch/bio/m/c/n/mcnaughton_jh.htm

John Hugh McNaughton 1829-1891

1829, Caledonia, New York.

1891, Caledonia, New York.

Caledonia Rural Cemetery, Caledonia, New York.

Little is known of McNaughton. His best known secular work was *The Faded Coat of Blue*, a song about captured Union soldiers in the American civil war. A monument to McNaughton stands on the farm where he lived near Caledonia.

His works include:

As We Went a Haying (Geordie and I)

Belle Mahone, 1859

Abraham's Tea Party, 1864 (<https://www.youtube.com/watch?v=fpaEz-GZEFQ>)

Babble Brook Songs, 1864

Onalinda: A Romance in Verse (New York: G. P. Putnam's Sons, 1884)

Mormon Tabernacle Choir のホームページ

<https://www.mormontabernaclechoir.org/articles/love-at-home.html>

The History of "Love At Home"

John Hugh McNaughton はニューヨークのカレドニア出身で、真実の原則に貢献した彼の名誉を表す記念碑があります。1829年にスコットランド人の両親に生まれ、よく知られている賛美歌「Love at Home」を書いた知られていない作曲家でした。この賛美歌は聖書のパラフレーズや祈りを読むようなものでないという点でユニークです。

賛美歌「家庭の愛」は、家庭が成功するという積極的な主張を表しています。それが起こると、地上のさまざまなものさえも、より栄光に満ちた美しいものによって「全世界は愛に満ちている」ように見えます。それは天の御父が神の子たちに対する神の愛の喜びを込めて、「ああ、家に愛があるときに、笑顔を浮かべる人がいる」とご覧になるようにです。

(中略)

マクノートンは彼の音楽と歌詞が誘発した感情のために「詩人マクノー

トン」として知られていました。彼はまた、スコットランドのルーツに深い愛を持って、ローマ時代にスコットランドの詩的な名前だった「カレドニア」を曲名にしました。カレドニアはまた、ニューヨークでの彼の出生地の地名でした。

“Love at Home”が掲載されたアメリカの歌集は同じ名前の改訂版も数に入れれば 100 を超える。その多くは日曜学校用の歌集である。歌詞には Jesus, Christ, God が出てこない。かすかに One というのがあるだけである。それが日本語に翻訳されなかった理由ではないだろうか。

高校の校歌で使われている件

小泉智牧師の「広島の高校でこのメロディーに校歌の歌詞がついている学校がある」、という発言について調べてみた。

ひねくれ教育日誌 賛美歌＝校歌

<http://takashiyoshida.com/cgi-bin/takachan/index.php?eid=36>

広島県の呉市にある呉港(ごこう)高校におじゃました。今の時代に珍しく男子ばかりの学校である。

若い音楽の先生の授業を見せていただいた。パワーあふれる授業だった。

その授業では、発声練習をかねて、生徒が校歌を歌ってくれた。

その校歌、曲がなんと現在の賛美歌 430 番「いもせをちぎる」である。

ひねくれ教育日誌 校歌＝讃美歌(その 2)

<http://takashiyoshida.com/cgi-bin/takachan/index.php?eid=41>

○『小学生生徒用新唱歌・志きしま』

「嵐山」 根岸小弥太 作詞 1893

これは、安田寛さん編集の『近代唱歌修成』に紹介され、CD にも録音されている。

ただし、途中で、別の旋律が入っている。

これだけ有名な旋律だから、この旋律は他の唱歌でも使われているのではないか。資料が手元にはないので調べられない。

(四)	(二)	(一)	
花の こ か け に 立 ち よ り て	う つ を は ら さ ん 其 の 爲 に	西 の 都 の 嵐 山	嵐 山
櫻の 花の さ か ゆ る 御 代 に	學 の 友 と 手 に 手 を 取 り て	時 は 彌 生 の 花 咲 く さ か り	
遊 ぶ け ふ こ う 樂 し け れ	來 り 見 る こ そ 樂 し け れ	雲 か 霞 か は た 雪 か	

二十五

嵐 山	
機イ調	四分ノ四拍子
5, 3, 3, 2, 1, 6, 1 -	5, 6, 5, 3, 2 - 0,
ニシノミヤコノ	アラシヤマ
3, 4, 5, 3, 1, 6, 1 -	5, 3, 2, 3, 1, 6, 1, 0,
トキハヤヨロノ	ハナサクサカリ
7, 2, 2, 2, 1, 2, 3 -	6, 1, 1, 1, 7, 1, 2 -
クモカガヌミカ	ハクニキ -- カ
3, 4, 5, 3, 1, 6, 1 -	5, 3, 2, 3, 1 - 0,
ウツテハラサシ	ソノヤマニ
5, 5, 1, 1, 3, 3, 2, 0,	3, 1, 6, 5, 6 - 1 -
マナヒノトモト	ラニラサトリク
3, 4, 5, 3, 1, 6, 1 -	5, 3, 2, 7, 1 - 0,
キタリミルコン	タノシクレ

二十四

これで、小学校の唱歌に HOME が使われていることがわかった。「途中に別の旋律が入っている」というのは「あまつましみず」では省略されているコーラスの部分だろう。

『小学生生徒用新唱歌・志きしま』は神奈川県尋常師範学校教諭小林錠之助撰曲、横浜石川校訓導根岸小彌作歌『小学生生徒用新唱歌 志きしま』日の丸舎から出たものである。原本を国立国会図書館のデジタルライブラリーで閲覧することができた。

さらに唱歌を調べていくと別の唱歌集にも"HOME"が使われた歌があった。

伊沢修二編『小学唱歌』全六巻 (大日本図書株式会社, [1892], 1893)明治25, 26年

小学唱歌 卷之三

③二十四 美術国 (阪 正臣作詞 John H. McNaughton 作曲)

一 皇国のほまれ数多ある

なかにも画かき ものきざむ
すぐれしたくみ妙なるちから
よそには類ひなかるべし

勤めはげめ いまより
のちも いやましに

二 すまへる国の うるはしき

すがたにあえて おのづから
やさしきところ 優なる想ti
つくれるものに 見ゆるなり
つとめ励め いまより
後も 彌ましに

美術国

♩ = 84.



伊沢修二編『小学唱歌』全六巻は国会図書館のデジタルライブラリーには第 1 巻のみが公開されている。斎藤基彦氏のホームページ (<http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby/music/isawa1/isawa1.html>) に全巻収録されていた(省略されている部分もある)が、Yahoo!ジオシティーズは2019年3月31日をもってサービスを終了した。

暫定的結論

『基督教聖歌集』は七五調や五七五七七の短歌を多く収めた歌集だった。しかし、西洋の曲に合わせることが困難だった。そのため『新撰讚美歌』以後は日本の韻律に合わせることが放棄されてしまった。また、日本語の詩も従来の韻文から離れてきて、短歌などごく一部の者たちの趣味になってしまった。

しかし、「ケータイ短歌」のブームが起きて若者の間で口語による短歌が流行りたしている。こうした形での新しい賛美歌と賛美歌曲が生み出されても良いのではないだろうか。

明治のプロテスタント初期に行われた試みは単に欧米の言語で書かれた作品を日本語の該当する単語に置き換えるということに止まらず、欧米の精神性を日本の精神性において受け止めるという作業であった。日本の賛美歌史にはこの受け止めが充分になされたであろうかという問いが残されていると感じている。

永井の原歌詞が改変されていった理由について詩形の問題よりも意味内容の問題については、十分に検討できなかった。17歳の少女の作品の未熟さを考慮してもなお未解決の問題がある。一信仰者の信仰告白と共同体の信仰告白の問題である。一信仰者の告白に対して「アーメン」があるのだろうかと思う。

これまで HOME について調べてきたことをまとめると次のようなことになる。

HOME の元来の詞、つまりマクノートンが作詞した賛美歌 "There is beauty all around" (Love at Home) は日本語訳されていない。また教会に伝わっている "HOME" は、後半のコーラス部が省略されたかたちである。しかし、"HOME" は賛美歌としてではなく、小学唱歌として複数の歌詞が付けられて、原曲通りの形で日本で歌われていた。

今のところは、"HOME" に充てて文部省唱歌として用いられた最も古い歌詞がどれであるかの特定に至っていない。明治 17 年（『基督教聖歌集』の発行年）に発行された『小学唱歌集』には "HOME" は含まれていない。だが、日本で歌われた賛美歌は "HOME" の原曲とは違いかたちであり、唱歌は原曲通りであることは、教会とは別ルートで "HOME" が文部省の手に渡ったことを示すのではないか。唱歌は原曲に合わせて歌詞を作り、賛美歌は永井糸子の歌詞に合わせて後半のコーラスの部分はカットされたものだろう。

"HOME" が文部省に採用された経緯は更に調べるべき事柄である。

（日本キリスト教団鈴鹿教会牧師）